



中村 哲・尚子

パキスタン

ウルドゥー語研修中

みなさんお元気でしょうか。こちらに来て2ヶ月がすぎました。いろんなことがあったので、ずいぶん長く感ぜられます。日本もまだ酷暑の候だと思いますが、こちらの暑さも格別で、地元の人が暑い暑いと言っているのでよほどの気温だろうと思います。

モンスーンが来てからさしもの暑さも下火になってきましたが、パキスタンの西北部は雨が極端に少く、水不足から来る不衛生状態や緑地の少さは想像を超えるものがあります。バングラデシュでは逆に洪水とのこと、まことにまなならぬ世界です。

語学校の方は何とか追いついてやってゆけています。しかし、諸々の必要手続きのために、ここマリー町とベシャワール市とイスラマバード市をゆきつ戻りつ、官庁の非能率にふりまわされておかげで授業日数は半分以下、普段は時間に寛容なパキスタン人の先生も顔負け、「愛すべき模範生」の異名をとりました。

しかし、このことは決してマイナスにはならず、ラウルピンディやベシャワールに多く滞在することで、山岳会関係の人や多くの地元の旧友たちと接する機会が多くなり、将来に備えて少しずつ協力の輪を着実に拡大することができています。それに、人々の実情を知るには「お医者さま」などという肩書きつきでは駄目で、ベシャワールでも「トルキスタンから来た」と言って旧バザールの下町に泊まることにしています。こうやって華々しい病院の業績集には載ることのない様々の実情を知ることができます。これは常に、「上から見おろすのではなく、下から上を見ようとす」というJ O C Sの方針に沿うやり方だと理解していますが、事実こうして実りのある前知識を沢山得ることができました。

パキスタンの辺境部は、まだまだ一部の学者や山岳会関係者以外には知られておらず、まず土地の正確な風俗や習慣を肌で知っておかねば、動けるものではありません。暇を作っては、今の自由な機会を利用して実際に出かけよう努めています。

なお、国語のウルドゥ語は北西辺境州では理解する人の方が少く、パシュトゥ語（アフガン語）かベルシャ語が公用語に近い状態です。私のウルドゥ語もまだまだ中途半端ですが、九月からはパシュトゥの学習に重点をおくことにしました。前準備が大変です。今さらながら、これまでのワーカーの方々の御苦勞を思い、敬意を表しました。9月からは、手初めにライ病棟を受けもつことになります。どうぞお祈り下さい。

(1984. 8. 6 原爆で逝った人々に祈りをささげつつ。)